

# 偽物の番

あさじなぎ

イラスト BEEBAH



偽物の番  
下巻

- ・ p 3 …漆
- ・ p 6 1 …捌
- ・ p 1 3 3 …玖
- ・ p 1 7 2 …あまけ
- ・ p 1 8 7 …あとがき

あさじなぎ  
表紙絵 BEEBAR

漆

七月二日土曜日。

バイトが休みなのをいいことに、俺は昼まで寝ていた。

正午を過ぎ、寝るのに飽きて起き上がる。

スマホを見ると、瀬名さんからメッセージが来ていた。

『おっはよー。今日はよろしく。でさ、夕飯ここから選んどいてね』

その後に、デリバリーサイトの「ER」と、ハートが乱舞したスタンプが送られてきている。

なんか恋人に送る内容みたいだ……俺、瀬名さんの恋人とかじゃないんだけどな。俺の貞操、大丈夫か……？

一抹の不安を抱え、俺はベッドから起き上がった。

今日は朝から雨が降り続け、やむ気配は全くなかった。

十七時二十分。紺色の傘を手に、俺は約束のコンビニ前に着く。

いつも千早と待ち合わせる東口じゃなくて、西口のコンビニだ。

ちよつと早かったな。

たぶん瀬名さんは十七時までバイトなんだろう。

つてことはもうしばらくすれば来るかな。

誕生日かあ。

俺の誕生日は十二月四日で、千早は七月の末だったと思う。

そうか、千早の誕生日近いのか……

そう思うと、胸に鈍い痛みが走る。

なんでだこれ。

去年まで当たり前のように祝っていたはずの友達の誕生日。

でも今は……

心に広がるもやもやの意味が分からない俺は首を振り、瀬名さんが来るのを待った。

しばらくして、白いパーカーに帽子を被った瀬名さんが、小走りにやってきた。

手には、ケーキが入っているであろう大きな箱を持っている。

……ホールケーキって言ってたっけ。

え、まじかよ。

男ふたりでホールケーキ喰うのか？

彼は帽子のつばを持ち上げ、俺に笑いかけた。

「お待ちせ、結城」

「お疲れ様です。あのそれ、ケーキですか？」

言いながら、俺は瀬名さんが持つ箱を指差す。

「うん。テイラミスだよ。あと食事はデリバリー頼んであるよ。車で来たから、行こうか」

あ、やっぱり貴方の家に行くんですね。そんな気はしていた。

大丈夫かな……いや、大丈夫だと信じたい。俺は生返事をし、瀬名さんの横を歩いた。

ピザ二枚にポテト、それにサラダがリビングのテーブルに並ぶ。

瀬名さんは二十歳になった、と言う事で白ワインのボトルを開けていた。

俺はまだ未成年なので炭酸ジュースだ。

「瀬名さんて、実家遠いんですか？」

ピザを食べつつソファアの隣に腰かける瀬名さんに尋ねると、彼は首を横に振る。

「ううん。市内だよ」

そして彼はポテトを口に放り込んだ。

「え、何で市内なのにひとり暮らし……」

「追い出されたから」

事もなげに言い、瀬名さんは白ワインのグラスに口をつけ、にっこりと笑いワインを見つめた。

「甘くて悪酔いしそうだなあ」

「酔わないでください。っていうか、追い出されたってどういう意味ですか」

「ああ、両親、特に父にとって僕は邪魔なんだよ。『番』である僕の『母』と過ごすのにね」  
番。そうか、そもそもアルファってオメガからしか生まれえない。だから瀬名さんの「母」ってつまりオメガなのか。

「僕の『母』は、十七で僕を産んだんだよ。運命の番である父に強引に抱かれて」

瀬名さんは笑顔で語り、白ワインを飲む。

紅い縁の眼鏡の奥にある目は、笑っていない様に見えるんだけど。ちょっと怖い。

とても笑顔で語るような内容じゃないのに、なんでこの人は笑って話してるんだろうか。  
「ご、強引て……」

「父に出会ったとき、『母』は十六だったそうだよ。父はいくつだったっけな。忘れちゃった。医学生だったと思うけど。父は『母』を独占したいんだよ。それに僕は邪魔だから、さっさと追い出したんだ。その割には進路に口出してきてケンカしたけど」

「進路でケンカですか？」

「うん。僕は小児科に行きたいんだけど、父は外科に行けと言ってさー。まあ、しばらく帰ってないよね。連絡も取ってないし」

千早も追いつかれたみたいなこと言ってたっけ？

何なんだ、アルファの家庭ってどっかおかしいのか？

至って普通の家庭で育った俺には信じられない話ばかりだった。どんな顔をしているのかわからず戸惑っていると、瀬名さんはグラスを置き、俺の頬を両手の指で掴み、ぐいと引っ張った。

「にやにしゆる……」

「暗い顔をするからだよ。僕の身の上話なんてどうでもいいことだよ。今僕はこうやって生きて生活しているし、好きなことやっけていられるしね。ねえ、結城、笑っているのが一番だよ」

そして瀬名さんは俺の頬から手を離れた。

顔、いてえ。俺は頬をさすりながら瀬名さんが言ったことを反芻する。

笑っているのが一番、かあ。

当たり前のことだけど、今の俺にはすごく難しいことのように感じてしまう。

「だからさ、僕は君が苦しむ姿を見たいとは思わないんだよ。その苦しみが、なくなるといいけど」

苦しみ。

俺の苦しみて何だろう？

俺に俺は苦しんでる？

……あ、考えたらまた、胸が痛くなってきた。

「俺は……何でこんなに……」

眩きそして、俺は胸を押さえる。

千早に囚われて、望まない形で関係を持たされて。

やばい、心がバラバラになりそうだ。

徐々に呼吸が早くなったりとき、身体を抱きしめられた。

瀬名さんの匂いがある。でもアルファの匂いとかじやないんだろうな。たぶん、本人がつけてる香水の匂いや、シャンブーの匂い。

それはそうだ。俺はオメガじゃないから、アルファの匂いなんてわかるはずないんだ。その事がまた、俺に苦しきを感じさせる。

「まさかこんな話で苦しくなるなんて思ってたなかった。ごめんね」

優しい声が耳元で響く。

「君は、自分が何かに苦しんでいるっていう自覚、ないのかな」

そんな自覚があったら俺、苦しんでなどいないんじゃないだろうか。

俺は抱きしめられたまま、何度も頷く。

「君の様子が明らかに変わったのは、五月にバイトを休んでからだよ」

五月。バイトを休んだ日。

それが何を意味するのかすぐに気が付き、俺の鼓動はどんどん早くなっていく。

それは千早の部屋に連れ込まれて、抱かれた日。

そしてその直後の水曜日に確か、瀬名さんに匂いがするって言われた記憶がある。

「君は望んで、彼に抱かれているわけじゃないのかな」

核心をつかれ、俺の心臓は止まりそうになる。その通りだ。瀬名さんの言う通り俺は……

望んで今の状況にいるわけじゃない。

「この間、君が過呼吸を起こしたきっかけの話が、君の彼氏の話だったからさ。関係あるの

かなって思ったんだ。君が苦しい原因は彼じゃないのかなって」

それを聞いて、俺の心のどこかで、ぴきり、と音がしたような気がした。

千早。

宮田の発情。

五月の出来事。

望まない関係。

変えられた身体。

——偽物の番。

色んなことが一気に頭の中を流れて行き、俺の息はどんどん苦しくなってくるし、胸の痛みも強くなっていく。

なんでこの人は、今俺に、そんな話をするんだ？

「せ、な……さ……」

「僕は君を傷つけようなんてしないよ」

傷つけようとはしない。

確かにそうかもしれない。

瀬名さんは俺がずっと見ようとしなかった現実を、見せようとしているだけなんだから。震える手で俺は、瀬名さんの腕を掴んだ。

そのとき俺の視界が歪んでいることに気が付き、泣いていると自覚する。俺の頭の中がぐちゃぐちゃだった。苦しみの原因。この痛みの理由。

五月から変えられた生活。千早は宮田に拒絶されて少しずつ心を壊していった。それは俺も目撃している。

あいつが発情した宮田に逃げられたとき、明らかにおかしかった。

逃げられた怒りを俺にぶつけてそして――

その後の出来事を思い出し、俺は瀬名さんの腕を掴む手に力を込める。

望んでいたわけじゃない。こんな関係。

大学に入って、世界が広がると思っていた。でも現実は何？

千早の作った世界に俺は囚われ、俺の知らない運命に絡め取られようとしている。

俺が望んだ世界とは明らかに違う。

そうか。

俺は、あの日から少しずつ、心に傷を負っていた……？

千早に抱かれたあの日から。違う。千早が悪いわけじゃない。でもあいつが俺を、犯したのは事実じゃないか。

「お、それは……」

現実を認めたくない自分と、現実を直視すると訴える自分がせめぎ合いわけがわからなくなってくる。

「琳太郎。ここには僕しかいないよ。だからいくら泣いても、感情を出しても大丈夫だよ」  
瀬名さんの声を聞き、涙がどんどん溢れてくる。

「僕が、受け止めるから」

何か言いたいのに何を話したらいいのかわからないし、言葉にもできない。  
出るのは嗚咽ばかりだった。

どれくらい時間が経っただろうか。

体感では十分も経っていないように思う。

その間俺は、瀬名さんに抱きしめられたまましばらく泣いていた。

瀬名さんに色々と喋りたいのに、涙がこみ上げ何も話せない。

「思った以上に、重傷らしいね」

瀬名さんが真面目な声で呟くのが聞こえてくる。

重傷。

誰が？ 何が重傷？

だめだ。考えれば考えるほど、思考がまとまらず苦しさが溢れてしまう。

「せ、な……さ、ん……」

「無理に話そうとしなくてもいいよ。その様子じゃあ無理でしょ？」

確かに声を出そうとすると涙が出てきてしまう。

こんなの初めてだ。

感情が俺のコントロールから離れているような感じがする。

何が起きてるんだ、これ。俺の身体の事なのに、全然わからない。

「しばらく休む？」

問われて俺は、無言で頷き倒れるようにその場に寝転がった。やばい、頭がくらくらする。ここはソファだ。必然的に俺は、瀬名さんの太ももを枕にしてしまう。

手が、俺の頭を優しく撫でる。

考えがまとまらないまま寝転がり、どれだけ時間が過ぎただろう。

だいふ気持ちは落ち着いてきたけれど、頭の中はまだめちやくちやだった。

「俺、大丈夫、かな」

嗚咽交じりに呟くと、瀬名さんは笑って言った。

「駄目だから泣いたりしてるとるんでしょ？ 自分では大丈夫なつもりでも、少しずつ少しずつ、心は傷ついていっているんじゃないかな」

心は傷ついている。言われてみれば、心当たりはあり過ぎる。

でもそれを口にしようとする涙が出てきてしまうから、結局俺は、瀬名さんに何も説

明できずにいた。

「僕は事情を知らないけれど、想像はできるよ。今の状況は、君が望むものとは違うのかな」  
俺の望みとは違う物。だめだ。思考がまとまらない。

「ごめんね、喋り過ぎた。そのまま寝ていいよ」

言いながら、瀬名さんは俺の頭をまた撫でた。

「……え、でも……」

「何か気になるの？」

気になるに決まっている。

このままここで寝転がっているわけにもいかないし、それに、今日は土曜日だ。

時間になったら俺は……

喋ろうとすると、唇が震えてしまう。

「どうしたの、結城」

瀬名さんが、俺の顔を見おろしてくる。だいふお酒を飲んでいるはずなのに、酔っている様子は全くない。

俺は首を振り、

「俺は、大丈夫です、から」

枯れた声で言い、俺はゆっくりと身体を起こす。すると、瀬名さんが後ろから俺の身体を抱きしめてきた。引き止めるかのように。

やっぱり匂いがある。たぶん、香水だよな。今まで瀬名さんの匂いなんて気にしたことなかったけど。ちょっと甘い感じの匂いがある。

「こんなに震えているのに、どこに行くの」

「そ、それは……」

出た俺の声は震えていた。落ち着いた、と思いたかったのに、まだ俺は駄目らしい。

「本当に落ち着いたなら、もう少し食べていきなよ、まだ、ケーキもあるし」

ああそうだ、ケーキあるんだった。

今日は瀬名さんの誕生日のお祝いだって言うのに、俺、何してるんだらう？

それを思うと、自分が情けなくなってくる。

「ピザ、もう少し食べるんなら温めるけど？」

「いいえ、大丈夫です、すみません、ありがとうございます」

見れば、二枚のピザはどちらも一切れずつ残っているだけだ。意外と喰ってた。サラダもポテトもほとんど残っていない。

「じゃあ、結城」

瀬名さんが、俺の身体から離れて行く。

「僕は片づけて、ケーキ持ってくるから待ってて」

立ち上がりながら言い、瀬名さんは俺に手を振った。

直径十五センチはあろうテイラミスのホールケーキを、ふたりで四分の三食べ終えた頃。時刻は二十時を過ぎていた。

今日は、土曜日。

この後、千早の所に行かなければ。

俺はスマホを手に取り、ロックを解除した。なぜだろう、スマホを持つ手が震えてしま

う。

俺は今、千早に会いたいだろうか？ 考えれば考えるほど、息が苦しくなってくる。

画面に表示される、千早とのトーク画面。俺はそれを見つめたまま、動けなくなっ

た。

千早。

友達。

セフレ。

——身代わり。

言葉が頭の中をぐるぐると駆け巡る。

俺はソファアーの上で膝を抱えて俯き、どうしようかと考えた。

「借りるよ」

声と共に、ひよい、と、瀬名さんが俺の手からスマホを抜き去っていく。

驚く間もなく、俺の隣に腰かけている瀬名さんは俺から奪ったスマホをタッチして、それを耳にあててしまった。

……え、この人、俺のスマホで何してるの……？

「やあ、こんばんは、秋谷千早君」

え、千早に電話かけてんの、この人？

俺の心臓が、激しく鼓動を繰り返している。

なんで、千早に電話、え？ え？

手を伸ばさず俺を片手で制し、瀬名さんは笑顔で言葉が続けた。

……眼鏡の奥の目は、笑ってない。

「呼び捨てかあ。僕、とりあえず君よりは先輩なんだけどね……あはは、冷たい声だね。琳太郎だけど、今日と明日、僕が預かるよ」

預かるって何？

何決めてるんだこの人……？

混乱する俺をよそに、瀬名さんはほとんどん話を進めていってしまふ。

「ずいぶんと機嫌の悪い声だねえ。理由はわかってるんじゃないの？ ちょっと彼、発作起こしちゃってさ。そんな状態で原因の所に行かせられるわけないでしょ？」

原因、と、はつきり瀬名さんは言った。

千早が、俺のこの状態の原因……

わかっただけはいたはずなのに、いざ人の口からそれを聞くと手が震えてくる。

「無言、ってことはやっぱり君は自覚があるんだね。自分がやっている事……君は、自分が彼の心を壊していると自覚してる。だよな？ 君は彼の優しさに甘えすぎだよ」

その話を横で聞いている俺は、気が気でなかった。

やばい、心が痛い。身体も震えて何が何だか分からなくなってくる。

「あはは、気付いてた？ 匂いだよ、彼はベータなのに、いつも君の匂いをさせていたから何でなのかと思つて。普通の接触じゃあ、あんなに強い匂い纏わりつかせないしねー。君が何もしていなければ、僕は彼にそこまで興味を持たなかったかも」

いったい何を言っているんだこの人は。

だめだ、考えがまとまらない。

「今日は君の所に返さない。わかった？」

そこで瀬名さんは電話を切ったようで、スマホを俺に差し出してくる。

「はい。宣戦布告しちゃった」

無邪気に言う事かよ、それ。

宣戦布告って何？

何とかスマホを受け取り、カタカタと歯を鳴らし震えていると、瀬名さんが俺の身体を抱きしめてきた。

「だから今日は、ここにいて大丈夫だよ。君はベッドで寝ればいいし。僕はソファで寝るから」

ここにいて大丈夫。本当に、これでいいんだろうか。

千早——

考えると確かに苦しいし、会わなくちゃいけないという思いと、このままでいいんだろうか、という思いが交錯して訳が分からなくなってしまう。

会いたくて会いたくない。

やばい、息が苦しい。俺は瀬名さんに抱きしめられたまま、ゼーはーと荒い息を繰り返

した。

「ベッドで休もうか」

瀬名さんはそう呟くと、俺を抱えるようにして寝室に運び、ベッドにそっと寝転がせた。そこにタオルケットがかけられ、俺は枯れた声で言った。

「す、すみま、せん……」

「送っていかうかと思っただけ……そのまま寝ていなよ。どうせ明日は日曜日だし。泊まっても問題ないでしょ？」

言いながら瀬名さんは、ベッドに腰かけて俺の頭を撫でる。

善意なんだろうけど……瀬名さん、俺を家に帰したくないんじゃないだろうか？

瀬名さんが俺のスマホを取り上げながら、

「彼の所に行かせるのだけは、絶対にしたくないんだよね」

と言った。

「な………んで」

「だって、君の不調の原因は彼だからだよ。結城だって、それはわかっているんじゃないの？」

瀬名さんの言う通り、俺だってわかってはいる。なんで俺が苦しんでいるのか。何がス

トレスなのか。

俺が苦しんでいるのは……千早との関係だ。

友達だった。友達である時間が、ずっと続くと思っていた。でも、それは壊れてしまった。千早の前に、運命の番が現れたことによって。

それでも俺は……千早が望む限り今の関係が続けよう、と思った。自分の心を誤魔化しても。

俺と千早、このままどうなるのかな。

あいつが始めたこの関係。ずっと続くなんて思っただけじゃなかった。歪んだ関係はぜったいにどこかでひずみが生まれてしまうから。

「君が心を壊すことなんてないんだよ、結城。彼は素直にオメガを求めておけばよかったのに、ベータである君を手にするなんてどうかしてる」

どうかしていたから、俺を求めたんじゃないだろうか。五月のあの時、千早は明らかにおかしかったから。

「で、も……」

千早だって苦しいんじゃないだろうか。苦しかったから、宮田を逃がした俺に標的を変えてきたんだろうから。

「でも何？ 君が犠牲になる事ってあるの。君は優しすぎるよ」

瀬名さんの、容赦のない言葉が俺の心を抉りにかかる。

犠牲になっているつもりなんてなかったけれど……苦しきはずっと、俺の中にある。

「そしてその優しさに甘えていた彼が、僕には許せないんだよ。アルファとかオメガとか、本来なら君は関わる事はないのにそれに巻き込んだのは、最低な行為だよ」

声音はいつもと変わらないけれど、でもどこか怒りを含んだ声に聞こえてくる。

「それについては僕も変わらないか。僕も君を巻き込んでいるんだから」

それってどういうことだ？

喋りたいのに声を出そうとすると嗚咽になってしまう。

瀬名さんの顔を見るけれど、室内は薄暗くて表情がよくわからない。

声が出せず俺が咳込むと、瀬名さんは俺の目に手を当てて言った。

「今はおやすみ、琳太郎。苦しい中で考えても答えなんて出ないから。彼は少し、反省すべ  
きだよ」

何にも言い返せないまま、俺は瀬名さんに言われるがまま目を閉じそのまま寝てしまっ  
た。

\*

夢を見た。

千早に抱かれる夢を。

俺は自分から千早の上に乗る、あいつの腹に手をつけて自分から腰を振っている。いつもなら俺は、今頃こうしていただろう。

でもこれは夢だ。

なのに妙に生々しい。腹の奥が熱いし、後孔がひくついているような気がする。

『琳』

時おり千早は、俺の事を、琳、と呼ぶ。

そう呼ばれると俺の心は震え、思わず声が漏れ出てしまう。

『う、あ……千早……』

『いい眺めだぜ、琳』

千早が俺の身体を下から突き上げるたび、俺の身体を快楽が走っていく。

これは夢だ。そのはずなのに俺のペニス硬くなり、後孔が疼き出す。

「ち、はや……」

自分の声にはっとして、俺は目を覚ました。

オレンジ色の間接照明だけが点いた薄暗い室内に俺は戸惑い、ここが俺の部屋ではなく瀬名さんの部屋である、と思い出す。

今、何時だ？ 俺は、スマホを探して視線を巡らせる。

ベッド横の棚に置いてある事に気が付き、手を伸ばしてそれを掴み、ロックを解除した。時刻は二十一時半。

一時間くらい寝ていたんだろうか。

そういえば、シャワー浴びてないし、歯も磨いていない。

俺はふらふらと立ち上がり、寝室の扉を開けた。

扉の外はすぐリビングで、灯りが煌々とついている。

聞いたことのないピアノ音楽が流れ、瀬名さんはソファに腰かけて本を読んでいるようだった。

音に気が付いたらしく、瀬名さんは顔をあげてにこっと笑った。

「ああ、起きたの」

言いながら、瀬名さんは本を閉じてそれをテーブルの上に置く。

「あ……はい。あの、歯も磨いてないし、風呂も入ってないから……」

そう俺が答えると、お風呂に入るなら服を貸すと言い、俺を風呂場に案内した。シャワーを頭から浴びながら、俺は今日の出来事を考えた。

瀬名さんが千早と何を話したのかわからないけど……あいつ、大丈夫だろうか。

瀬名さんに色々言われて、あいつ、黙っていられるわけないよな。

あいつだってプライドあるだろうし、言われるままで終わるとは思えない。

……あいつは、確か瀬名さんの事、調べたんだよな……ってことは、この場所もわかるはずだ。

俺は、心のどこかで千早が来るのを期待している……？

会うのが怖いのに。

卒業までの身代わりと言われて、週に四日も抱かれて、ずっと心に矛盾を抱えてきたのに……俺、千早に会いた気持ちはずっとある。

あいつは今でも、俺の事、身代わりだと思ってるんだろうか？

そもそもあいつには宮田という運命の番がいる。

運命の番とのつながりはそう簡単に切れるものじゃないらしいし……って俺、千早との関係、続けたいんだろうか？

この一か月ちよつとの間に、俺は何度もあいつに抱かれて……やってる夢まで見ちゃっ

て。

「友達でいられると思ってたのにな」

高校から何も変わらないと思っていて。変わりようがないと思っていた。

俺はどうしたいんだろうか。

自分の事のはずなのに、闇の中をさまよっている様で何も見えない。

シャワーを浴び、着替えのない俺は瀬名さんのジャージを借りる。彼と俺では五センチくらい身長差があるため、ちよつとでかいから裾を少し折った。

リビングに戻ると、瀬名さんは本を読んでいた。

室内の掛け時計を見ると、時刻は二十二時を過ぎたところだった。家に帰ろうと思えば帰れただろう。けれど俺は、結局帰る気持ちになれずここにいる。

親にこんな話せねえしな……過呼吸の事も、千早とのことだって俺は何にも言っていない。

別に親との関係が悪いわけじゃないけど……俺が泊まりで家に帰らなくても何にも言わ

ねえし、遅くなくても特に何にも聞いてこないなそう言えば。

家で過呼吸起こしたらどうしよう。そう思うと帰れない。親に心配かけたくねえしな……  
タオルを頭からかぶったまま考えていると、俺の名を呼ぶ声に気が付く。

「結城、大丈夫？」

顔を上げると、いつの間にか目の前に瀬名さんが立っていた。

「あ……」

彼は俺の前髪に軽く触れ、

「大丈夫？」

と言う。

大丈夫かと聞かれたらどうだろうか。

……大丈夫じゃないから、俺は家にも帰れずここにいるんだよな。

「飲み物、用意してくるよ」

そう言っつて、瀬名さんは俺から離れてキッチンへと消えて行った。

その間、俺は壁一面の本棚の前に立った。

漫画もあるし、英語の本もある。すげえな、これ。全部自分で買ったのか？  
「実家にだいたい置いてきちゃったんだよね。これでも」

「え、マジですか？」

「マジだよー」

そして瀬名さんは、俺に麦茶の入ったグラスを差し出してくる。

「あ、ありがとうございます」

札を言い、俺はグラスを受け取りそれに口をつけた。熱い身体に冷たい麦茶はとてもおいしく感じる。

「さすがに全部持ってこられなかったから。一部屋まるまる本棚で使ってたし。捨てられてはいないと思うけど、どうかなあ」

そして、瀬名さんは苦笑する。そんなに持ってるんだ、ちよつと羨ましい。

「まあ、親は僕にそこまで興味はないはずだから大丈夫だと思うけど」

「そ、そうなんですか」

コメントに困る話で、俺は顔をひきつらせてしまう。

俺は、姉たちとはたまにしか帰ってこないからしばらく会ってねえけど、両親との仲は普通だ。

俺が毎週泊まりに出かけてもそこまで突っ込んで来ないし、詳細を聞こうとはしてこない。

ただ、夕飯を食うのか食わないのかの連絡をしないと無茶苦茶怒られる。作る方の気持ちを考えると言われるので、そこだけはちゃんと連絡を入れるようにしていた。

両親とそんなに冷え込むってどうなってるんだいったい。  
「また、暗い顔してる」

言いながら、瀬名さんは俺の頬を指で掴み、引っ張ってくる。

すぐに指が離れ、俺は左手で頬を撫でながら、

「だから何するんですか、もう」

と、抗議した。

「だって、暗い顔するから」

「だからって、引っ張らなくても……」

「暗い顔で顔の筋肉固まったら嫌じゃない？」

「そんなことあるわけじゃないでしょ」

笑わせようとしてるのか、本気で言ってるのかわかんない。そういえば、この人、笑ってること多いな。だから余計に、何を考えてんのかわかんねえけど。

「あると思うけどなあ。君は、暗い顔が多いじゃない？ だからそれで筋肉が……」

「ないですから、冗談もほどほどにしてください」

やっばりこの人と話していると調子が狂う。

俺ずっと、瀬名さんの手のひらの上で踊らされてるよなあ……

何考えてんだろうなこの人。

千早と何話したのかわかんないけど、宣戦布告、とか言ってたよな。

千早、大丈夫だろうか。

会いたい気持ちはあるのに……考えると手が震えてしまう。

「歯ブラシ、洗面台に用意しておいたから使って。まだ顔色よくないから早く寝たほうがいいよ」

促されるまま俺は、歯を磨きそのまま寝室へと入りベッドに横たわった。

「おやすみ」

という言葉と共に、扉が閉ざされる。

なんか瀬名さん、強引じゃないか……？

結局、千早と何を話したのか聞きだせていない。

俺は、スマホを手にして時間を確認する。

二十二時半を過ぎていくけど、さすがにまだ眠くない。

それはそうだろう。普段寝るのはもう一時間くらい遅い。

だから眠いわけがなかった。

「って、あれ？」

スマホにメッセージが来ている。

名前を確認すると、心臓がばくばくと大きく音を立て始めた。

千早だ。

どうしよう。

震える指でメッセージアプリをタッチして、内容を確認する。

書かれていたのは、たった一言。

『そばにいてほしい』

だった。

たった一言なのに、俺の感情を揺さぶるには充分で。

しかもこのメッセージアプリは、俺がそのメッセージを確認したことが相手に知られてしまう。

見た以上、何か返さないと。でも、なんて返す……？

画面をじっと見つめて悩んでいると、新たなメッセージが表示された。

『今、あいつの所にいるのか？』

あいつ、というのは瀬名さんの事だろう。

千早は、瀬名さんのこと調べてるわけだからこの場所もわかるんだよな。そもそも、駅挟んでそんなに離れていない。歩いて十分少々で着くだろう。

なんて言おう。

俺、どうしよう。

『家には、帰ってない』

それだけ返し、俺はスマホの画面を見つめたまま待った。

すぐに既読がつき、俺の鼓動は早くなっていく。

『今から行く』

……なんだって？

今から来るってどこに？

ここに？

どうしよう、俺。千早が来るなら……外、行かないと。

俺は、スマホを握りしめたまま立ち上がり、寝室を出た。

寝室を出るとすぐリビングで、ソファーに寝転がって本を読む瀬名さんの姿が目に入った。

彼は俺に気が付くと、すっと起き上がり、本をテーブルの上に置いてこちらに歩み寄ってくる。

そして彼は、俺の前で立ち止まるとにこっと笑い、「彼に呼ばれたの？」

と言った。

その言葉に、心臓が跳ね上がる。

瀬名さん、顔は笑っているのに目は笑っていない。

声だって抑揚がなく、威圧感を感じてしまう。

俺はスマホを握りしめたまま瀬名さんを見つめ、

「え……あ……」

と呻る事しかできなかった。

千早が、来る。

たぶん、十分くらいでこのマンション前に着くだろう。

「ねえ、行くの？ 彼に会いに」

「そ、それは……」

瀬名さんの手が俺の頬に触れる。

「そんなに怯えた目をしてるのに、彼に会って大丈夫なの」

会って大丈夫かどうかなんてわからない。

千早に会いたいと言われて……俺は行かなくちゃいけないと思って寝室を出てきた。でも、俺は……千早に会う勇氣、あるだろうか。

考えると手が震えてしまう。

「ねえ、君が苦しんでいるのは彼との関係でしょ？　なのに……彼に会いに行くの？」

「う……あ……」

瀬名さんの言葉に俺は何も言い返せず呻き声しか出せない。

瀬名さんの手が俺の頬に触れる。

「会って、どうするの」

会ってどうする。

そんなの何も考えていない。

そばにいて欲しい。

たった一言そう言われ、俺の心は揺れ動いて。

傷つけられたのは俺の方だけれど、会いたいと言われて俺は……いかなくちやっと思ってしまう。

どうしたらいいのかなんてわからない。

俺はベータだ。

オメガじゃない。だからきつと、俺は捨てられる。

でも……今会わないと後悔する気がして。

俺は俯き、声を絞り出す。

「わかんない……けど、千早が来るなら俺、会わないといけないって思うから」

そうだ。

千早が来る。

会わないと俺は後悔する。

今はまだぐちゃぐちゃで考えられないけど……俺はぎゅっと手を握りしめて、言葉を続けた。

「ちよつとだけ会ってきます……瀬名さん、俺は、大丈夫だから」

大丈夫だから。

俺は心の中で何回もその言葉を繰り返す。

でも身体は震えているから、きつと大丈夫じゃないんだろう。

「心が疲れているときは、正常な判断なんてできないよ？」

それはわかっている。それでも俺は……

「俺は……大丈夫じゃないけど……でも……話してきたい、から」

つかえながら言うのと、瀬名さんは俺の肩に手を置いたかと思うとそのまま俺の身体を抱き寄せた。

普段なら抵抗するところだけど、そんな気力はなく、俺はされるがままになっていた。

それにしても力が強い気がする。

まるで恋人にするような……

「僕としては行かせたくないんだけどなあ。このままここにいたらいいのに。僕は君を傷つけないし、同意なく抱くようなことなんてしないから」

そう呟いた後、瀬名さんはすっと離れ、いつもの笑みを浮かべて言った。

「戻ってこなさそうなら迎えに行くから」

迎えに行くってどういうことだよ？

そう思ったもののそれを口にできる雰囲気ではなく、俺は黙って頷いた。

俺はスマホを握りしめてそのまま部屋を出て、震える手でスマホを操作する。千早からメッセージが来ていた。時刻は二十三時過ぎ。

『あいつの、マンション前についた』

ああ、本当に来たんだ、千早……あいつの家からここまで大した距離じゃねえもんな……そう思うと鼓動がやばい。エレベーターの扉の前に立ち、俺はボタンを押してエレベーターが来るのを待った。大した時間じゃないだろうに、待つ時間が長く感じる。しばらくしてエレベーターが来て、俺は誰もいない箱の中に入り震える指で俺は階数ボタンを押す。やばい。まづい。

緊張？ 恐怖？

俺の心を支配しているのは何だよ。自分が一番分かんねえよ。

エレベーターが一階につき、扉が開く。息苦しかった箱の中から出て、俺は大きく息を吸い、吐いた。湿気と熱を帯びた空気が重たく喉に張り付く。当たり前か、もう七月だもんな。廊下を進み自動ドアを二つ超えたら、外に出られる。俺は震える手を見つめそして、それをぎゅうっと握りしめ廊下を進んで行った。

自動ドアを出ると、むわっとした空気が肌に纏わりつく。

「琳太郎」

辺りを見回す間もなく、聞きなれた低い声が響いて俺は思わずびくり、と身体を震わせた。

恐る恐る、声が出た方を見る。

マンシヨン入り口の横、街灯から少し外れたところに黒い影がある。闇に溶ける様な黒いパンツと、黒いTシャツ。茶色に染められた少し癖のある髪。その影は、二重の瞳を細め俺を見ている。

「琳太郎」

「ち、千早……」

顔を見ると、いつきに色んな記憶が頭の中を流れていく。千早に犯された日の事、その時の自分の感情、悲しみと、苦しさ……抗いようのない快樂。足が震え動くことができずにいると、千早は小走りに近づいてきて俺を抱きしめた。

大丈夫だって思ったのに、いざ千早を目の前になると、どうしたらいいかわからなくなってしまう。

『心が疲れてるときは決めないほうがいいよ』

という、瀬名さんの言葉を思い出す。今、俺は何かを決めたいわけじゃない。俺の今の気持ち伝えたい。千早に。なのに、唇が動くどころか、息が苦しくなってくる。

「ち、はや……」

呻くように名を呼び、そのまま俺は黙り込んでしまう。ダメだ、俺、このままだと壊れてしまいそうだ。

「無理に、喋ろうとしなくていいから」

苦しげに言い、千早は俺を抱きしめる腕に力を込めた。

「会えて、良かった」

その声に俺の心が揺らぐ。

俺はどうだろうか。会いたかった？ それとも会いたくなかった？

……その両方だ。

俺は迷い、そして、重い腕を上げて千早の背に回した。

なんだろう、千早がなんだか小さく思える。

気のせい、かな。

「琳太郎」

「……うん」

「俺がお前にしたことはいくら謝っても許されるものじゃないって思ってる。お前を、こんな風にしたのは俺自身だ」

「千早……」

「運命の番なんて、最初は信じていなかった。なのに、俺の前に宮田が現れて。でも、彼は俺を拒絶した。そして俺は……お前を……」

そこまで言って、千早は口を閉ざす。

五月、発情した宮田を千早が見つけ、俺が割って入った日。

あの日、俺が千早を止めなかったら、こんなことにならなかったんだろうか？

でもそうだったら俺は、宮田と言う友人を失っていたことになる。だからあの時の事を、俺は後悔なんてしていない。

「千早、俺は……お前と、友達でいたかった」

高校から大学生になって、関係が変わるなんて思わなかった。

世界が広がるだけで、まさか千早とあんなことになるなんて思っていなかった。きつと、元の関係になんて戻れはしないだろう。

それだけ俺と千早の関係は、歪いびつなものになってしまっている。

身体は繋がっていても、心の繋がりは……切れてしまった。

五月のあの日、千早の部屋で。

「……それを、壊したのは俺だ」

「うん」

「元には、もう、戻れないほど、俺はお前との関係を壊してしまった」

「……うん」

壊れたものを直すのは無理だろう。

でも……

「創る、ことならできるんじゃない……かな？」

震える声で言いながら俺は、自分で言ったことを考える。

壊れたなら創ればいい。その結果、同じものにはならないだろうけれど、別の形になら  
できるだろう。

俺は、千早を抱きしめる腕に力を込める。

「琳……」

「俺……今はまだ分かんないけど……俺、千早に言いたかった。友達でいたかったって。俺  
は、千早と、一緒に……普通に、過ごしたかった……よ？」

最後は涙声になり、まともに喋れなくなってしまう。

千早は息を飲み、そして、

「ごめん」

と、泣きそうな声で言う。千早のこんな声を聞くの、初めてかもしれない。

どこで間違えたんだろう。なんでこうなったんだろう？

誰のせいでも……ないと思いたい。アルファとかオメガとか。そんなの俺には関係ないはずだった。

なのに、そんな運命に縛られた友人たちが運命に翻弄されて……抗おうともがいている。今までそんな世界、知らなかった。本当なら関わりなんてもたなかっただろう世界。

千早。宮田。悠人さん。

彼らに出会わなければ俺、アルファとかオメガとかに関わることもなく、その苦しみや悲しみも、知ることもしなかったんだよな。

「琳太郎。最初は俺、お前を番にしようと思っていた。運命の番の身代わりに。そんなの、間違っているとわかっていても止められなかった。いくら謝っても許されるわけじゃないけど俺は……今、お前と、一緒にいたいと思うよ」

千早の言葉は、最後の方は嗚咽交じりの声になっていた。

……千早、泣いてる？

こいつが泣いてるのなんて、見たのいつ振りだろう？

いや、ないかも……

一緒にいたい、と言った千早の言葉を心の中で繰り返す。

「……身代わりじゃなくて？」

「身代わりじゃなくて、俺は、お前がいいんだよ、琳太郎。オメガとか、アルファとかそんなものを越えて、俺はお前を選びたいってそう思ってる。お前がいなかったら俺は……運命の番に拒絶されたこととづくに壊れていたから」

運命の番ってなんなんだろ？ こんなにも人を狂わせるものなのかよ？  
ただひとりに拒絶されたことで心を壊してそして、俺の世界を歪ませて。

謝ってすむ話ではないだろう。それは今の俺でも理解できる。千早が悪いのは確かだ。  
そして、千早自身、何が悪いのか理解している。

なら俺は……何を選んだらいい？ 今はまだ、その答えを出す時じゃないだろう。

「ご、めん……俺……」

出た声は涙交じりで、まともに言葉にならない。

すると千早は腕の力を緩め、俺の顔を見つめ両手で俺の頬に触れる。

その目には、確かに涙が浮かんでいた。

「無理に、答えを出さなくていい。俺が犯した罪は、そう簡単に償えるものじゃないから」  
「ち、はや……」

「俺は、お前を選んだ。それに、嘘はないから」

千早の真剣な瞳に、俺の心が揺らぐ。

「千早、俺……まだ、何にも考えられなくて……」

言いながら、俺は視線を下に落とす。俺はどうしたいんだ？ 千早と……俺は。

「時間はいくらでもある。急いで結論を出さなくて、大丈夫だから」

時間はいくらでもある。瀬名さんと同じことを言っている。その時間を、俺は生かせるだろうか？

「あいつから電話が来て、俺、すぐにお前を連れ返そうと思った。けれど……あいつに俺がお前の心を壊してると言われて……分かってはいたけど、人に言われるとけっこうくるな」  
そして、千早は苦笑する。あいつ、て、悠人さんのこと、だよな。さっきの電話でそんなこと言ってたし。

「連れ戻す、なんて考え自体おかしいのか、顔を合わせるのはいけないのか。悩んで俺は、ここに来た。俺はお前をずっと手元に置いておきたかった。閉じ込めて、俺だけのものにしたかった。俺の父親が『母親』にそうしていたように」

千早の、母親。家に遊びに行っても、泊りに行っても会うことは一度もなかった。

アルファの母親だから、オメガ、なんだよな……

瀬名さんの親も母親を閉じ込めると言ってたな。宮田の知り合いのオメガも、閉じ込められてそれを当たり前だと思ってる。それが普通なのか？

俺の髪を切ってくれたオメガの美容師さんみたいに、外で働く人もいるのに。

俺も、そうやっていたかもしれないのか。そう思うと、胃が冷えるような思いた。閉じ込められるなんて、俺はそんなの……受け入れられない。

俺の頬から手を離しそのまま手を俺の肩に置く。そして千早は俯き、苦しげに息を吐く。「今からでもそうしろと、叫んでる……」

「ち、はや……？」

「今からお前を連れ帰って……そうしたらずっと、一緒にいられる？」

まるで、自分に問い掛けるかのように千早は呻く。明らかに様子がおかしい。

五月の、俺を部屋に連れ込んだ時の様子に似ている。そう思うと、足が震えてくる。

「お前はオメガじゃないのにな。俺の本能は、お前をオメガとして扱えと訴えてくる。そんなの間違ってるのに」

震えながら、千早は嗚咽混じりに呟いた。

「なんで、そんな事になるんだよ……」

怯えた声で俺が呟くと、千早は首を振る。

「俺の本能は、どこかおかしくなっているんだろうな。それは自覚しているよ。宮田に拒絶された時から少しずつ。たぶん、あの五月の出来事が一番大きいかな。あの時俺の本能は、お前を番にしると叫んでいた」

本能がおかしくなる。

それがどういふことなのか俺にはわからない。

千早が正常じゃなかったのはわかる。でも、今もそうなのか……？

さっきまでの言動は普通だと思う。

でも今は……？

狂気と理性の間で、揺れ動いてるみたいだ。

千早が顔を上げる。

獣のような瞳をしているのに、顔は苦しみで溢れてる。

この瞳で見られると、俺は囚われた草食動物のようになってしまう。逃げることなど許されず、喰われるのをただ待つだけの。

背中を冷たい汗が流れていく。これは、暑さのせいか、それとも恐怖のためなのか。逃

げなくちゃ、とっさにそう思うのに、俺の身体は全然動かない。

どうしたらいい、俺。このまま俺は……どうなるんだ？

怯えていると、千早が目を閉じた。そして、次に開いたとき、獣の影は消えていた。黒い双眸に、俺の顔が映ってる。泣きそうな顔で千早を見ている。

「お前と俺、友達でいられたはずなのにな」

友達。当たり前な事なのに、すごく重い。

俺たちにとって当たり前な事が、当たり前前じゃないんだな、千早にとっても……宮田や、瀬名さんにとっても。

友達でも、アルファやオメガだったら……その関係は脆くも壊れてしまうんだから。

「運命は俺の手から逃げていき、だから俺は別の運命を掴もうと思った。掴みたかった。お前の意思など関係なく」

それは、千早がそんな愛情しか知らないからだろう。

束縛することが愛情だと俺は思わないけど……でも俺は、本来なら選ばれることなんてないのに、選ばれさせて、その愛情を注がれていた。狂い壊れるほどに。

「今は……何にも考えらんなくて……俺……ごめん、千早」

今の俺は、千早の想いに答えることができない。

それでも、千早の想いはわかったし、俺の想いも言えた……かな？

千早は首を振り、

「会えて良かった」

と、哀しげに微笑む。

「俺は、運命に抗いたかった」

運命なんて俺、考えて生きたことねえよ。なのに、この二か月近く、その言葉を何度も耳にした。何度も考えた。

もし、千早がその運命から逃れられたら俺と、ちゃんと向き合えるのか？  
千早の片手が俺の頬に触れ、顔が近づく。

心のどこかで、俺は千早に恐怖を抱いてる。

でも、それよりも大きいこの感情は……わかつてはいるけれど今の俺に、その感情の名前を認識する余裕はなかった。

「ありがとう、琳太郎」

額に、わずかに唇が触れそして、千早は離れて行く。

やだ。

離れたくない。

やだ。

今一緒にいたらきつと俺の傷は、増えていく。

わかってるんだ。

今は離れたほうがいいって。

なのに。

捨てられるような気持ちになるのは何でだよ？ 涙で視界が歪む。

一緒にいたくなくていたくない。

「ち、はや……！」

とっさに俺は千早に手を伸ばし、その腕を掴む。

すると彼は驚いた顔をして立ち止まり俺を見る。

「琳太郎……？」

「お、それは……」

そこで言葉が詰まる。捨てないで。怖い。

言葉がまとまらない。

「そこまでだよ、琳太郎」

後ろから抱きしめられそして、千早から引きはがされてしまう。

「あ……」

「言つたでしょ？ 心が苦しい時に大事なことを決めようとする判断を見誤るよ」

瀬名さんの声。

千早の表情が、一気に険しいものになる。

「瀬名……悠人」

「また呼び捨てにするの？ まあいいや。そう言うことだから、今は僕が預かるよ。いいよね、千早君？」

挑発するような言い方が、瀬名さんらしくない。

その声は千早のあの声と同じ響きを持っていた。聞いた相手を従わせる、威圧的な声。それを聞くと俺の心は委縮してしまう。

——その声は、嫌いだ。

千早は苦しげな顔をして、黙って背を向け歩き始めてしまう。

俺は去る背中に思わず手を伸ばした。

待つて。

置いて行かないで。

俺を囚えたのは、お前じゃないか。

「琳太郎」

耳元で、瀬名さんの落ち着いた声が響く。

「ほら、落ち着いて。汗かいてるから、中で水を飲もう」

その言葉に俺は、嗚咽でしか答えられなかった。

俺は、瀬名さんに半ば強引に部屋に戻されそして、ベッドに寝転がされた。

俺は丸くなって震えて、ただ泣くしかできなかった。

千早に捨てられた？ 違う、そうじゃない。わかっているのに。喪失感が半端ない。

「琳太郎」

名前を呼ばれたけれど動くことができず、俺は毛布を被ったままでいた。

すると、毛布がはがされて肩を掴まれたかと思うと、顔が近づき唇が重なる。

唇の隙間から水が流れ込み、口の端から漏れてシートを濡らしていく。

大半の水は俺の口の中を流れ、喉奥へと侵入していく。

唇が離れ息をつくくと、またすぐに口づけられ、水を飲まされてしまう。

と同時に、舌が入り口の中を舐め回された。

何をされているのか、理解が追い付かない。

しばらく舌が俺の口の中を弄んだあと、唇が離れそして、瀬名さんと視線が絡む。眼鏡をかけていない瀬名さんの顔は、ドキツとするくらい綺麗に整っている。彼はにこっと笑い、

「気分はどう？」

と言った。

なんでこの人は俺にキスなんてしてくるんだ？ 意味が分かんねえよ。

困惑していると、瀬名さんの指が俺の頬を撫で、

「酷い顔になっちゃったね」

と言い、目元に口づけてくる。

「ちよ……なに、して……」

「泣いている子は放っておけないんだよ」

だからってキスするかよ？

ていうか、水を飲ませる手段、キス以外にあるよな？

ねえ、あるよな？

「たぶん混乱して追いかけてよとするとするんじゃないかと思つてさ。ちよつと様子見てたんだよね。行って正解だったよ」

それについては凶星過ぎて何も言い返せない。

「僕は今、君を彼に渡す気はないよ。それは彼も十分理解したでしょ？ だから琳太郎。君は今、ここにいたらいよいよ」

「悠人……さん」

「だからとりあえず、今日は僕と一緒に寝ようね。だってー、今日は僕の誕生日をお祝いした日だもん。それくらいのお願い、聞いてくれるよね」

いや、その理屈なんか変じやないかとか色々突っ込む余裕はなく、瀬名さんは俺の隣に寝転がりそして、俺をぎゅうっと抱きしめた。

匂いがする。瀬名さんの纏う、優しい匂いが。

抵抗する気力など今の俺にはなく、俺はされるがままになつてしまつていた。

「もう疲れたよ僕は。寝よう。そしていい夢見て、いい気分で起きようよ」

そして瀬名さんは大きく欠伸をした。

いい夢を見て、いい気分で……か。

いい夢つてなんだろうな。

……分かんねえよ。俺は瀬名さんの胸に顔を埋め、

「おやすみ、なさい」

と、何とか口にして目を閉じた。

「おやすみ琳太郎。いい夢を」

\*

結局、よく眠れなかった。夢を見たのかもわからない。それでも時間は経つし、朝は来る。気が付くと、部屋の中は徐々に明るくなり、夜が明け始めたことを知る。

俺は寝返りを打ちそして、瀬名さんの顔が目の前に来て彼と共に寝ていることを思い出す。

彼は寝息を立て、よく眠っているようだった。俺を抱きしめて。

身体が怠いし、心も辛い。そういえば俺、今日バイトだっけ。働けるかな。

好きな仕事なのに、行けなくなるかも、と思うと心が重くなってしまう。

……働ける気がしねえ。

「起きてるの」

眠っていると思つたのに、声が聞こえて死ぬほど驚く。

瀬名さんはゆっくりと目を開けて、俺を見た。

「まだ、早いでしょ？ 寝ていた方がいいよ」

そんなことはわかっている。わかっているけれども、眠れる気がしない。まだ頭の中はぐちゃぐちゃで、心はざわついている。

去って行く千早の背中が、脳裏に浮かぶ。

すると胸に痛みが走り、俺は息をつき胸を押さえた。

なんでこんなに痛むんだよ、意味わかんねえよ。

追いかけてやいけなかったのか、俺。千早の背中を。

「琳太郎」

顎に手がかかり、目が合ったかと思うと唇がふさがる。

この人なんでこんなにキスしてくるんだ？

弱々しく手で瀬名さんの胸を押すが、そんなんじやあ動くわけがない。触れるだけのキスをされたあと、瀬名さんは俺の顔を見て優しく笑う。

「このまま抱いてしまえたらいいのに」

何言い出すんだこの人は。俺は真っ赤になって目をそらした。

それは、そんな関係は俺、望んでない……たぶん。

……この人なら俺を苦しめたりはしないでだろうけれど。でも俺は……だめだ、考えがまとまらない。

「今は休む時間だよ。休んで落ち着いて、考えられるといいんじゃないかな」

「瀬名さん……」

「いられる限り、僕は一緒にいるよ」

という言葉と共に、腕の力が強くなる。

休む時間か。

たしかにこの二か月近く、いろいろあったしな……

っていうか、来月俺、試験じゃん。

あと二週間ちよつとで前期の講義が全部終わって、レポートの課題とか出されるんだよな。

それを思うと、今は落ち着く時間が必要かも。

単位、落としたくねえし。

俺、ちゃんと試験受けられるのか？ そこまでの精神状態になれるといいけど。

急に現実を思い出し、俺は別の意味で落ち着かなくなっていく。

「まあ、僕も月末から試験や課題があるから、そんなに構ってられないんだけど、それは向こうも君もいっしょだよね」

「たしか、八月一日から試験だったはず……」

大丈夫か俺。いや、でもまだ一か月あるじゃねえか。そこまでに少しでも、心が晴れたらいいけど。

「来月までには梅雨も明けるでしょ。だからほら、いっしょにゆっくりしよう」

そして瀬名さんは欠伸をする。

「そう、ですね」

いっしょにゆっくりしよう、という部分が少し引つかかるけど、俺は瀬名さんの背中に腕を回しその胸に顔を埋めた。

結局、その日はバイトを休んだ。

その代り、瀬名さんが出勤することになったけど。

「琳太郎、これ」

仕事に行く準備をした瀬名さんは、ソファーに座る俺に鍵を渡してきた。

どこの鍵かはすぐに理解した。

この部屋の鍵だ。

俺は渡された鍵と、ソファーの横に立つ瀬名さんの顔を交互に見る。

なんで渡されたんだ、こんな大事なもの。

「好きな時に来ていいよ。たぶん、発作はまた起きるだろうし。ここなら駅からも近いしね」

「え、でも……」

そんなお世話になる理由が俺にはない。

戸惑っていると、瀬名さんの手が俺の頭に伸び、髪をくしゃくしゃとされる。

「ちよ……」

「君は甘えていいんだよ」

甘えていい。そう言われても、どうしたらいいのかわからない。

甘える？ ってどうするんだっけ？

「だから、苦しくなったら来たらいい。家に帰れない時に来たらいい。どうせ僕はひとり暮らしだし。誰にも咎められることはないから」

そして瀬名さんは俺の頭から手を離し、手を振る。

「じゃあ、行ってくるね」

「あ、はい、いってらっしゃい」

瀬名さんは白いシヨルダーバッグを掛け、玄関へと向かって行く。

俺はその背中を、見えなくなるまで見送っていた。

俺は瀬名さんの部屋で漫画を読んですごし、彼の帰りを待たず家に帰る。

そもそも瀬名さん、俺の代わりにバイトに行っただから、夜まで帰ってこないのだから、そんな時間までここに居るわけにはいかなかった。

その間、千早からは何の連絡もない。心のどこかで、俺はあいつから連絡が来るのを待っているだろうか。

夕食の後風呂に入り部屋に戻って、ベッドに寝転がりスマホを見つめる。鳴るわけがない、ただ黒い画面を見つめ、俺は息をつく。

連絡なんて来るわけがない。そんなのわかってるのに思わず見てしまう。

だからと言って、自分から連絡する勇気もないし、そもそもアプリを起動しようとする

だけで手が震えてしまうから、連絡なんてできるはずもない。

怖い気持ちもあるのに、求める気持ちもあって自分でもよくわからない。この想いの名前は、なんて言うんだろう。ただ、千早のいない時間が、すごく空虚に感じた。